
鏡に映ったもの

祥莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡に映ったもの

【コード】

N0763Z

【作者名】

祥莉

【あらすじ】

法要で訪れた寺で見たものは。

人見知りしない性格は、どうやら生まれつきのようで、ぼくは誰にでもニコニコと愛想を振りまく、極々手の掛からない赤ん坊だったそうです。

小学校に上がる頃になっても、それは変わらず、知らない人の後についていっては、よく迷子になりました。

夏になると毎年、母方のお婆ちゃんの法要がありました。

その夏も、電車をいくつか乗り継いで、家族皆でお寺へ出かけました。あちこちに散らばって住んでいる親戚たちとは、お寺で待ち合わせていました。

長い石段を上がったところに、お寺がありました。

子供の足には少しばかり高い石段でしたが、ぼくは元気よく掛け上がって行って、一番先に山門の前まで着きました。

真っ青な空の彼方に、真っ白い入道雲が、ぽつかりと浮かんでいきます。

あんまり暑くて眩しかったので、陰になっているところまで行くとお寺には似つかわしくないほど艶やかな赤い着物の女の人が、こちらに歩いてきました。

「どうにも暑いね」

ませたぼくの口振りにでしょう、女の方は可笑しそうに笑いました。

目元の感じが、ぼくの知ってる誰かに似てる気がしました。

親戚のお姉さんだったかな？

一所懸命思い出そうとしているうち、お姉さんは手をひらひら振りながら、本堂へ向かって歩いていきます。ぼくも、後をついていきます。

法要は、いつもその中で行われていました。

けれど、お姉さんの中には入らず、本堂を抜けて、その脇に建っているひと回り小さなお堂へと歩いてゆきます。

ためらうことなく、ぼくもその中に入りました。

お堂の中は、薄暗くて、ひんやりしていました。

お線香の匂いが立ちこめていて、目が痛いほどでした。回廊を進んでいくと、裏庭が見える間に出ました。

回廊の一番奥、お姉さんは一人佇んでいます。突き当たった所の下で、俯き加減に、手元を覗いています。

「何してるの」

ほんの少し首を傾げながら、お姉さんはぼくを見つめ、手に持っていたものを手渡してくれました。

飴色の、小さな鏡でした。

鏡を覗き込むと、その真上の天井が映りました。

鮮やかな極彩色で、様々なものが描かれていました。

鳥や、魚や、桃や、花。今、塗ったばかりのような鮮やかな赤い衣を纏った、細面の優しそうな、髪の長い綺麗な女の人。

「あれ、お姉さんにそっくり」

顔を突き合わせるようにして、お姉さんは鏡を覗き込みました。そこに映るはずの姿が、ぼくには見えませんでした。

不思議に思つて、顔を上げてみると。
お姉さんは、にっこり笑いました。

笑った両目から、不意に真つ赤な血が、その白い頬にどろどろと流れ出てきました。

みるみるうちに、眉も口元も吊り上り、裂けて、顔の皮ごと、べろんと裏に引つ繰り返りました。

すると長い髪の毛が伸びて、ぼくの両腕に絡み付こうとします。

声を上げることもできず、ぼくはただ闇雲に腕を上げ、振り回すことしか出来ませんでした。

乾いた音を立てて、鏡がどこかへ転がってゆきました。

お坊さんが拾ってくれたそれは、ただの丸い板でした。
裏を返しても、鏡などはめ込まれていませんでした。

父も母も笑うばかりで、ぼくの話を信じてくれません。
けれど、お爺ちゃんだけは、何も言わず、ただ黙っていました。

(f i n)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0763z/>

鏡に映ったもの

2011年12月7日00時57分発行